

平成20年10月24日

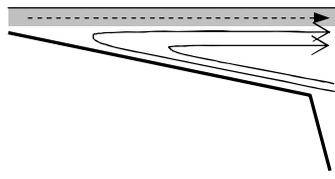
三番瀬再生に向けた河川との連続性の回復について（メモ）

首都大学東京 横山

江戸川からの淡水供給の状況

行徳可動堰以前	<ul style="list-style-type: none">・大正以前は旧江戸川の河口から淡水が回り込んでいたと考えられる・放水路建設時は床固めであったので、放水路を淡水が流れていた
行徳可動堰と浦安埋め立ての影響	<ul style="list-style-type: none">・行徳可動堰の建設および浦安の埋め立て以降は旧江戸川からの常時淡水が回り込みにくくなり、洪水時だけ突発的に淡水が流入する。可動堰が全閉か全開の運用であり、塩分濃度の連続性(汽水性)が無い

三番瀬と江戸川の繋ぎの回復

汽水性の環境	<ul style="list-style-type: none">・行徳可動堰から常時、淡水を供給することで、河川と海域の連続性を取り戻す（物質循環、底生生物、魚など）。・洪水時は堰の開度を連続的に変化させて自然な流量波形とすることで、突発的な環境変動を引き起こさない。
流動の促進	<ul style="list-style-type: none">・常時淡水が表層を流れることで海水が陸側に引き込まれ、海水交換が促進される。・塩淡境界面での陸域栄養塩や海域プランクトンの集積効果と生態系による利用が見込まれる。 
土砂供給	<ul style="list-style-type: none">・現在でも大規模洪水時は堰が全開なので大きな変化は見込めないが、中小洪水での土砂供給が増加する。

課題

環境影響予測	<ul style="list-style-type: none">・周囲の埋め立てと地盤沈下による水深増大により淡水の滞留性が高い可能性 塩分濃度の低下が現在の自然環境や漁場に及ぼす影響・淡水供給による鉛直循環流の発生が海水交換を活発化する可能性
運用等	<ul style="list-style-type: none">・旧江戸川の利水放流量を担保した上で、余剰流量を江戸川放水路に回すことになる・流れが強まることによる係留船や遊漁船への影響
土砂	<ul style="list-style-type: none">・市川航路による掃流砂のトラップは解消できず

国との協議

<ul style="list-style-type: none">・行徳可動堰の改築計画に対して、事前に三番瀬（千葉県）として堰運用方法に関する要望を伝えることが重要。計画が全て決まってから要望を出しても変更できない。・行徳可動堰は現行の運用（洪水時以外は全閉）が一番簡単な方法であるから、<u>千葉県</u>から要望がなければ現状維持と考えるのが普通である。
--